

IS～10の獣と歩む者～

proto

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

IS学園に来た青年ジョージ・狩崎は、学園生活の中で自身の研究の完成を目指していく。

# 目次

N o. 1	IS学園の狩崎くん	1
N o. 2	彼はポンコツなのかな？w	4
N o. 3	同室女子？研究できれば構わないね	8
N o. 4	彼女とはなにやら波長が合いそうだな	11
N o. 5	さあさあ、偉大なる第一歩だ！	14
N o. 6	私のシステムなら1泡どころか5泡は吹かせられるね	17
N o. 7	多少のピンチは新たな活路さ	
N o. 8	簡単に言いくるめられて助かるね	22
N o. 9	肉眼で確認するのは初めてだ …実際にエキサイティング！	25
N o. 10	良いデータが採れた…さて、と	29
N o. 11	さて…君たちの実力、見せてもらおう	32
N o. 12	戦況の変化は実に好ましいデータだ	35
N o. 13	織斑一夏の旧友は全員あ…やかm…五月蠅いのかい？	40
		43

No. 14 チャイナガール、君の機体

て難しいね

64

…このスタンブならいい勝負になるだろう

No. 20 さて、キャラじゃないけど、

うさ、ハハツ

背中を押しますか…

67

No. 15 トラブルは嫌だが…興味深

いデータは採れそうだ

49

No. 16 実にワンダフォ〜!!耐久性

のおかげで、素晴らしいモノが見れた

53

No. 17 パーフェクトアジャストメ

ントツ! 流石は私!!

57

No. 18 色々正体が割れてきたね、

一体どうなることやら…

60

No. 19 ハハツ、過去回想を語るつ

## No. 1 IS学園の狩崎くん

「……どうしても、戦わなきゃいけないの？」

少女は問う。

「ああ、これはすべての証明なんだ。この戦いを持って師匠を……あの人を超える！」

少年は答える。

それに応えるように少女は構え、少年もまた構える。

「変身!!」

『スクランブル!!』

……半年前／＼IS学園

国立高等教育機関にして女子高の……否、『元』女子高のIS学園。なぜ元が付くか？そりゃ、理由はひとつき。男子が入学したから。私は2人しかいない男子の一人というわけだ。

「織斑くん……おーい、織斑くん！」

どうやらもう一人は緊張でガツチガチのようだねえ。教師の呼びかけも聞こえて

ないようだ。

「おーりー！むーらー！くーん！」

「はっ、はい!!」

耳元で大きな声でようやくとは…よっほどのようだね。先生、涙目になってるよ。

「自己紹介をお願いしてるんだけど、織斑くんもお願い、できるかな？」

「あ、はい。えっと、織斑一夏です。」

名前だけ名乗って終わろうとする織斑一夏に周りの女子たちは、期待の視線を向けている。

「えー、んーと、以上です！」

その瞬間、織斑一夏の顔が消え、その場所には出席簿があった。どうやら、何者かに叩かれたようだね。実にクレイジーだ。

「やれやれ、我が愚弟ながらももう少しまともな自己紹介はできんのか。」

「げっ！承太郎！」

「スタープラチナツ!!」

もう一発、出席簿を喰らっている。彼はDMなのかな？

「誰がスタンド使いだ、馬鹿モン。山田先生、HRを任せてすまなかったな。」

先程涙目になっていたのは山田先生というのか。見た目に反して平凡だねえ。

「…さて、そのもう一人にも自己紹介してもらおうか。」

と、出席簿を私の方に向けている。私の記憶では、出席簿は凶器じゃないはずなんだけど…。

「ジョージ・狩崎だ。パイロットよりかはメカニック寄りだが、戦闘もそこそこ…だと自負しているよ。個人的な研究もあるが、ISにも色々興味がある。ま、一年間脱落者が出ないことを祈るよ。」

「最後の一言は余計だが…まあ織斑よりはマシか。」

どうやら、出席簿の餌食にはならなくて済んだようだね。

「さて、私が貴様らの担任を勤める織斑千冬だ。この一年で、お前たちを使い物になるようにするのが私の仕事だ。返事は「はい」か「YES」だ。狩崎ではないが、脱落者がでないことを祈る。以上だ！」

どうやらヤバい所にぶち込んでくれたようだねマスター師匠。危なく鼓膜が逝くと思ったよ。「では、10分後から授業を開始する。解散！」

威厳が凄まじいね。流石は元世界王者だ。さて、少し動くとしますか。

## No. 2 彼はポンコツなのかな? w

授業の準備だけ行い、私は織斑一夏に接触することにした。

「ハイハイ、君が織斑一夏だね。」

「お前は…ジョージ狩崎、でいいのか？」

「ジョージでも狩崎でも、好きな方で呼びたまえ。」

「じゃあ、狩崎で。狩崎は、どこで動かしたんだ？」

「What's? 動かした? 何を？」

「何って、ISだよ。俺は、試験会場間違えちゃって…。」

「どうやらかくなりのポンコツのようだ。」

「私は師匠マスターに入れられただけさ。まあ、私としても研究が捗りそうだったから来たけどねえ。」

「そ、そうなのか?」

「ISを動かしたわけでは…」

「一応コアは反応するけど…ま、私個人としてISを所有する気はないよ。」

「色々あるんだな…」

「ま、そういう事だ。それじゃあ、また。」



私がそう告げると、ちょうどチャイムが鳴った。

授業が始まるとかなり基礎の内容からのおさらいになる。師匠マスターからのレクチャーで、かなりの知識を得ている私には、やや退屈な内容だ。

が、どうやら一名：付いてこれていない者が居るようだ。

「織斑くん：ここまでは、大丈夫ですか？」

「えっと、全くわかりません：」

ここまでのポンコツ具合とは…。流石に驚きを隠せないよ、一夏。

「事前に配布された資料はどうした？」

「古い電話帳と間違えて捨て痛え!!」

出席簿アゲインだ。私は喰らいたくはないね、アレ。

「全く、お前は居残りで補習だな。：他に現状ついて来れてない者は？」

クラス内はシーンとしているね、私もノープロブレムだし。

「居ないな。では、織斑のみとする。」

一夏はこちらの方を向くが、もう一度言おう。私はノープロブレムだ。

「では、山田先生。授業の続きを。」

「あ、はい。では、続いて：。」

さて、如何に授業をサボりつつ、研究を進めていくか…。織斑女史にバレたら、間違いなく出席簿アタックが飛んでくるし…。

「では、ここで授業を終わります。」

おっと、考えごとをしていたら、終わったようだね。

休み時間になったので、私はPCを広げ、先の授業中に思いついたアイデアをまとめめる。

数分キーボード叩いていると…

「ちよつと、よろしくて?」

「今忙しいんだ、後にしてくれたまえ。」

顔も見ずにあしらう。この時間は貴重な研究時間だ。何者にも干渉されたくない。

「まあ、なんて野蛮な返答ですの。」

「……そもそも、Youは誰かね?」

「まあ、イギリス代表候補生であるこの私わたくし、セシリア・オルコットを存じ上げないと?」

「ああ、代表候補生か。で、それがなに?代表ならまだしも、候補生じゃねえ。」

応対しながらも、視線はPCから逸らさないようにする。やや強めにエンターキーを叩き、しよーがなくオルコットの方を向き直る。

「まあ、候補生とはいえお国を背負ってるんだ。自分の発言には責任を持った方が良い。」

それじゃ、グッバイ！」

再びPCに向き合い、データ調整を行う。

「やはり、実戦データがないとダメか…。」

私はそつとPCを閉じ、サングラスを外した。

## No. 3 同室女子? 研究できれば構わないね

2 限開始直後のことだ。

「そういえば、クラス代表を決めないとな…。誰か居るか? 自薦、他薦は問わんど?」

自薦、他薦は問わない。この言葉に嫌な予感を覚えたのは私だけではなかっただろう。

「はい! 織斑くんが良いと思います!」 「私はジョージくん!」 「私も狩崎くんを!!」

「織斑くんに一票!」

「織斑と狩崎だな。あとは…「納得いきませんわ!!」…オルコツトは自薦か?」

「…ええ! 自薦で構いませんわ! 大体こういう事は実力を加味して、そこから選ぶべきなのですわ! それに、文化的に後進的な国で暮らすこと自体…」

私はその言葉を遮るように、手を叩いて立ち上がる。

「へい、ガール。私はさつき発言に責任を持って、そう言つたよね?」

「うっ、それは…。」

サングラスを外しながら、詰め寄る。

「君の発言は国家代表候補生としてのものになる。それはすなわち、イギリスの言葉と

同意だ。君は、無責任な君のエゴで日本に宣戦布告することになる。」

ぐうの音も出ないレベルで論破にかかる：私らしくないがね。

「さて、これ以上の発言は、自身の首を絞めていると認知したところで：織斑先生、どうやって決めます？」

「そうだな…：オルコットの発言は過激とは言え、一理ある。自薦他薦された者たちで模擬戦を行う。日程は明日の放課後…：このタイミングで言っておくか。織斑、明日専用機が届く。後で職員室に來い。」

「はい！」

「狩崎はどうする？」

「明日までに準備をしておきます。」

「わかった。オルコットもそれでいいな？」

「望むところですわ。」

「では、授業を始める。教科書の…」

さて、急な模擬戦か。まだアレは使えない。もしくは…。

本日の授業は終わり、帰路に就こうとしたが、山田先生に呼び止められる。

「はあ、はあ、はあ…すみません、狩崎くん。」

「ハイ、ティーチャー。まずはクールダウン。はい、深呼吸して。」

そう言うと、ゆっくりと深呼吸を始める。

「それで?用件は何です?」

「えっと、部屋の用意ができたので、カギをお届けに∴。」

「Really?でも、荷物は∴。」

「荷物なら先程、お前の師匠を名乗る者から届いたぞ。」

「マスターから?グウウウレイトツ!!それじゃあ、カギ確かに受け取りました。」

「あ、はい。では、気を付けて下校してくださいね。」

「それでは、失礼。∴あ、同部屋は一夏?」

「いえ、別の方です∴急ぎで調整したので。」

「オーライ!では。」

行き先が外から寮へと変わった。これは、研究時間が増えるぞ!

私の足取りが軽くなった。

## No. 4 彼女とはなにやら波長が合いそうだ

寮の扉とカギの番号を照会する。

「この部屋か。1121…クウガが終わった年と月日だね、覚えやすくしてOK!」

足下に置いてあった私宛の荷物を手に取り、ノックをする。先に同部屋が居るかいな  
いか確認しておかないと、恐ろしいからねえ。

「は、はい。」

「あ、同部屋の者だけど…入ってもOK?」

「ど、どうぞ。」

許可を得てからじゃないと、最悪修羅場だからね。

「どうも。私は、1組のジョージ・狩崎だ!よろしく。」

「さ、更識…簪です。よ、よろしく。」

「ベッドには奥?それとも手前?」

「て、手前を…。」

「OK!それじゃあ、奥側のスペースはいただくよ。」

私は、ベッドに荷物を放り投げて、黒のタンクとオレンジのジャージというラフな恰

好に着替える。

「さてと、マスターからは…デスクトップに機材…うん、完全に私物を送ってくれたようだねえ。兎のマークも入ってる。マスターらしいね。」

IS技術を応用した便利なストレージがあるとはいえ、今日は軽めの着替えと、開発中のアレしか持ってきていかなかったからねえ。

「そしたら…スタンプとデスクトップをデスクに…あとは、後でいいな。」

デスクにデスクトップを設置、そこをベースにバイスタンプ関連の機材と10種のスタンプを置いていく。

「これって、スタンプ？」

「You、興味ある？」

「う、うん。なんていうか、『変身アイテム』っぽいつていうか…」

「イエス!!カンザシ、君の着眼点は実にエクセレントだ!」

彼女が引くレベルで熱弁を開始してしまう私…仕方ないね、それが私だ。

「これは、私が開発しているその名も…『ライダーシステム』だ!!まあ、基礎理論はマスターの受け売りだし…そも、まだ未完成だね。ISのコアを併用しないとうまく起動してくれないんだよ」

「そ、それって…、コアなら何でもいいの?」



「Why? まあ、多少条件はあるが、理論上可能だ。」

「わ、私…実は候補生、なんだ。」

「つまり、専用機持ち…ってことだね?」

マスターの下でも、コアの複製は叶わなかった。アレの完成の為には、そろそろなりふり構ってられないか…。

「へい、カンザシ! 君のコア、貸してもらえるかい?」

「う、うん。はい、コレ…」

多少ひったくるようにコアを預かり、解析を始める…

「カンザシ、君の腕にこれを着けてくれたまえ。」

ちよつとゴツめのリングを渡し、データを解析していく。

「これは…カンザシ、君元の機体は?」

「まだ、完成してない。」

「…私に、いや悪魔と契約する勇氣、あるかな?」

彼女は息を呑み、私に告げた…

# No. 5 さあさあ、偉大なる第一歩だ!

## 模擬戦当日

「よかつたんですか、織斑先生?」

「まあ、ヤツ自身が技術職と言っていたからな。お手並み拝見と行こうじゃないか、山田先生。…では、アナウンスを!」

「は、はい!」

二人は管制室から、アリーナ…模擬戦の現地を確認している。

『これより、オルコットさん対ジョージ・狩崎くん…に代わり、更識簪さんの模擬戦を開始します。』

## 試合開始前／狩崎控室

「初めての实戦だ。昨日の今日ですまないが、最大限サポートさせてもらう。」

「う、うん。」

「私も、初めての实戦だ…ISとの戦い方は君の方が慣れてるだろう。戦闘面に関しては、自由にやってくれたまえ。その代わりシステム面でのサポートは万全の状態で行わ

せてもらおう!!」

『これより、オルコットさん対ジョージ・狩崎くん…に代わり、更識簪さんの模擬戦を開始します。』

「さあ、出番だ。」

「いい、いつてくる!」

彼女を見送り、モニターに目を向ける。

「さあ、有意義なデータを見せてくれよ…更識簪!」

水色のドライバーを巻いて、歩いてアリーナへと入って行く。

「あの男は逃げたのですね。全く、あそこまでの大口を叩いておきながら…」

『私が直接行ってもよかつたんだがね!ま、君が負けたとしても他国の候補生相手なら言い訳がつかだらう?』

どうやらマイクを用意しておいたのだろう。スピーカーから彼の声が響いてくる。

「まあ、私のことを考えてのことです?…叩き潰して差し上げますわ!!」

「彼の技術が上だつてこと、証明して見せる!」

『ハイハイハイハイハイ!』

《レックス!!》

バイスタンプのボタンを押し、ベルトに押印する。

《Come on!レ・レ・レ・レックス!Come on!レ・レ・レ・レックス!》  
『カンザシ!バイスタンプをセットして、変身しろ!!』

「変身!」

《バディアップ!オーイング!ショーニング!ローリング!ゴーイング!》

どこからともなく幽体が、大きなスタンプのエネルギーのような物を、私に落とした。

《仮面ライダー!リバイ!バイス!リバイス!》

『グウウウウレエエトツ!!』

スピーカーが音割れするぐらいの歓喜の音が聞こえる。フルフェイスで助かった。

「これが、コアに宿ってる人格…。」

横に現れていた、もう一人を見つめてしまう。

「俺たちが、アンタのコアに宿ってた人格だ。」

「そ、そうなんだ。随分、怖い見た目だね…。」

『そこは、私が設定しているから、元々そういう見た目ではないよ!喋り方は、知らないけどね!さあ、敵は目の前だ!存っ分に暴れてくれたまえ!!』

「うん!!」

戦いの火ぶたは切って、落ちたみたいだ。

# No. 6 私のシステムなら1泡どころか5泡は吹かせられるね

《仮面ライダー！リバイ！バイス！リバイス！》

『さあ、仮面ライダーリバイ！そしてバイス！存分に暴れてくれたまえ！Let's S  
t a r t!!』

『あ、勝手に…。』

彼が勝手にスタートコールをしたことで、やや涙目の山田先生だったが、彼女はお構いなしのようだ…。

「さあ、踊りなさい！私の奏でる円舞曲で!!」

「イギリス…ブルーティアーズ…。」

彼女のメインウエプであるスナイパーライフルの銃口がこちらに向く。だが、私はまだ地面に足を着いたままだ。そんな私に、容赦なくレーザーの雨が降り注いだ。

だが、どうしたものか。普段から、あまり運動は得意ではなかったのだが、全て紙一重で…狙って避けられている。その高揚感からか、ちよつと楽しくなってきた私<sub>が</sub>居る。

「な、何なんですの！私をおちよくっているのですの!!」

『はっはっは、さてカンザシ。事前に説明した通り、そのシステムは飛行を想定していない。対等な戦闘をお望みのようだし『プテラバイスタンプ』を起動しバイスに押印するんだ。』

「わかった!」

左腰のホルダーに出現していたバイスタンプを取り、起動する。

《プテラ!》

言われた通りにバイスにスタンプを押印する。すると、バイスの身体が人型からエアバイクへと変わった。

「さあ！思いつきり楽しもうぜ!!」

「うん!」

私はバイクになったバイスに跨り、ティアーズと同じ高度まで上がる。

「…おふぎけになるのも、大概になさってくださいまし!!」

ライフルから乱れ撃たれた光弾を、アリーナ上空を目一杯使って避けていく。エンターテインメントを行っているかのような気分になる。彼の技術は、そこまでの余裕をくれる。

だが、現状防御しかしていない。そろそろ、攻勢に出たいな…そう思ったタイミング

だった。

『さて、そろそろゲノムチェンジと行こう！ プテラバイスタンプをベルトに押印、セットしてチェンジだ！』

《プテラ！》

プテラバイスタンプを押印台に押印する。

《Come on！ プ・プ・プテラ！ バディアアップ！ 上昇気流！ 一流！ 翼竜！ プテラ！ Flying by！ Complete！》

『ふうふうふう！！ 流石は、ファイズモチーフ！ スタイリッシュユキが抜群だ！！』

彼の興奮が聞こえてくる。が、今の私にはお構いなしだ。今だ撃たれ続ける光弾をバイスから展開された光の翼で切り裂いていく。

「くっ！！ まだまだ、ですわ！！ ティアーズ！！」

「アレがBT兵器…」

バックバックから射出されたものを、分析する。かなり自由が効くようだ。こちらの高速移動にも小回りで対応されてしまう。

『カンザシ！ 右腰のスタンプを掌に押印してみたまえ！』

いつの間にかあったスタンプを言われた通りに押印する。すると、スタンプから武器が生成された。

『それは、オーインバスター50！アックスにもガンにもなる！うまく活用してくれ！』  
「うん！」

一先ず、ガンモードでBT兵器の処理を始めた。

：彼女の柔軟性は実にワンダフルだ。非常に良いデータが取れている。

ほぼ初見の武装やゲノムの特性を十分に発揮してくれている。本来、国家代表候補生でコア持ちならば、自身の専用機を何十時間も乗り続けているはずだ。

まあ、完成前に一夏のISに人員を回され、一人コツコツと作ってきたのだ。サクツと乗り換えてしまったとはいえ、コアにその努力は届いていたのだろう。

事前の相性チェックでも、グレイトな数値を叩きだしていた。

「ここいらで、もう一ゲノムくらいデータを取っておきたいところだが…。ハイハイ、そろそろ戦況が大きく動きそうだね…」

全てのBT兵器を撃ち落とした。私はオーインバスターをアックスで構え、エアバイクでティアーズに迫っていく。

「これで!!」

大きく振りかぶって、攻撃を仕掛けようとした時だった



「ティアーズは、まだありましてよ!!」

ティアーズ腰部から、ミサイルタイプのBT兵器が射出された。それは私は直撃し、地面へと落下する。

「これで終わりですわ!」

銃口が向けられる。スコープを覗く瞳と目が合う。そして、光が私に降り注いだ。

## No. 7 多少のピンチは新たな活路さ

ティアーズのライフルから放たれた光弾を全弾浴びてしまったが、なんとかまだ無事なようだ。ただし、姿がプテラのものからレックスに戻ってしまっている。

「簪、とりあえずライフル破壊しておいた方がいいんじゃない？」

バイスの言う通りだ。一先ず体制を整え、相手の優勢状態を解く必要がある。

私は、オーインバスターをガンモードで構え直し、ティアーズのライフルを狙撃する。「ら、ライフルが……。まだですわ！インターセプター!!」

先程の乱射で疲弊していたおかげで、ライフルの破壊には成功した。遠距離特化の機体で近接戦武器を出したという事は、最後の武器という事だろう。

『へい、カンザシ!!カマキリバイスタンプを用意した!ゲノムチェンジからのリミックスだ!』

右腰にカマキリバイスタンプが出現しており、すぐに手に取る。

《カマキリ! Come on! カ・カマキリ! Come on! カ・カマキリ! バ  
ディアップ! いざ無双斬り! 俺が横切り! カ・マキリイ! 俺たちオンステージ!》  
「……からは……俺っちオンステージ!」

「その決め台詞って、私が…。ま、いいか！」

『さあ、バイスタンプを一回倒して、スタンプのボタンを押してもう一回倒す!!これで R e m i x だ!!』

言われた通りにスタンプを操作すると、私の意思とは関係なくバイスとの組体操?が始まった。

《リミックス!!必殺!コマ斬り!ブツチギリ!カマキリ!》

『WONDERFUL!!リバイスカマキリの誕生だ!!』

「勝負は一瞬…決めるよ、バイス!!」

「よっしゃあ!!輪切りにしちゃおうぜえ〜!」

上空に居るティアーズがブースターを吹かして、突進攻撃を仕掛けてくる。私たちは、羽で空へと向かい内に向かう。

ティアーズと接敵する。刺突突進攻撃を片腕で弾き、もう片方の腕で上空に斬り上げる。上に飛ばしたティアーズへと飛行接近する間に、スタンプを二回倒す。

《カマキリスタンピングフィニッシュ!!》

本来なら縦横無尽に切り裂くらしいのだが、相手のダメージも考え、一撃のみ叩き込むことにした。

『ブルーティアーズ、シールドエネルギーエンブレィ!勝者更識簪!!』

『実に素晴らしい戦いだっただよ、カンザシ!! プラボー!!』

スピーカーから拍手が聞こえる。それに釣られるかのように、アリーナから拍手が聞こえた。元々、これは1組のクラス代表を決めるための戦いと聞いていた。私は部外者だったのだ。それでも、こうして称賛が与えられた。胸の奥が暖かく感じた。

ミサイルの直撃によるダメージが予想外だったとはいえ、いい勝負をしてくれた。おかげで、素晴らしいデータが取れた。プテラゲノムとカマキリゲノムももう少し調整の余地が出てきた。

「10種を完璧に仕上げることで…アレの完成に繋がるか…。」

私は、何かに納得するようにそう呟いた。

## No. 8 簡単に言いくるめられて助かるね

戻ってきたカンザシはやや生身もボロボロだが、まあほぼ無事と言っていていいだろう。

「ヘー！実によく勝負だった。ナイスファイト!!」

拍手で彼女を迎える。そして、スポーツドリンクを差し出す。

「さて、ドライバーを貸してもらえるかな？」

「う、うん。」

私はカンザシからドライバーを受け取り、持っていたラップトップに接続する。

「簡単にはあるけど、調整をする…これで、もう少し性能が引き出せるはずだ。」

「あ、ありがとう。」

「お礼は結構！まずは、戦いに勝たないとねえ。よしっ！これでOK」

ドライバーをケーブルから外し、カンザシに手渡す。

「それから、次の戦いではプテラとカマキリは使えないから、別途戦略を立てなきゃいけないんだが…。」

一度控室のモニターを見ると次のバトルは一夏vsカンザシと出ている。

「…ま、口で丸め込めば何とかなるでしょ。そっちは私に任せてくれ。それじゃあ、最初

は…」

「わ、わかった！行ってくる!!」

私は最初の指示をし、彼女を送り出した。

「しっかし、まさか先にこっちとはねえ。…思いのほか海外製は脆いのかな？」

彼から受け取ったりバイスドライバーを巻き、再びアリーナへ。

「えっと、更識さんだっけ？よろしく。」

「よ、よろしくお願いします。」

『続いて、織斑一夏くんvs更識簪さんによる模擬戦を開始します!』

コールが聞こえたので指示通りにpink:マゼンタのバイスタンプを起動し押印する。

《メガロドン!! Come on! メガロドン!》

「変身!!」

《バディアップ! 潜るドンドン! ヨーイドン! ドボン! メガ・ロ・ド・ン! 通りすがりのハ・ハ・ハ・ハンター!》

「さつきとは違う姿に…。」

『イイゝエス!! メガロドンゲノムに変身だあ!』

「さあ、行くよバイス!!」

「よつしやあ!!サメちゃん姿の俺っちの活躍見てつてくれよな!」

『バトル開始!!今度はちゃんと聞いた...』

今回はこのゲノムで、と言われたが接近戦用のゲノムのようにも見える。彼はどうする気なんだろう？

『ヘイ一夏。まだ、操縦には慣れてなさそうだね...地面で戦ったらどうかね?今回は飛ぶゲノムじゃないし。』

「それじゃあ、お言葉に甘えて...」

どうやら彼の思惑通りのようだ。こちらが上がるのではなく、彼をこちらに下した。

「それじゃあ、行くぜ!!」

刀を構えて、突っ込んでくる。大きく振りかぶって接近してくるので、姿勢を低く駆け出していく...。刀が振り下ろされたのを、地面を泳ぐようによけ、ディヴァインソードですれ違いざまに斬る。しかし、掠った程度で決定打にはならない。

相手が体勢を整える前に、こちらから接近し、斬撃を放つ。向こうは浮遊状態でこちらの攻撃をガードしたせいかな、壁際まで吹き飛んだ。

「バイス!!」

「あいよつ!!」

バイスに合図を送り、オーインバスターによる射撃攻撃を始める。  
「くっ!! こんのおお!!」

射撃を強引に突破し、こちらに向かってくる。兜割りを仕掛けてきたので、腕の二本の剣で受け止め、弾く。

そのまま、突進斬撃を仕掛ける。一発目を下からにし、ガードしてきた剣をいなし、本命の2発目を確実に当てる。

『リミックスで一気に決めたまえ!!』

声に反射したように、ベルトを操作する。

《リミックス!! 必殺! 何トン? メガトン! メガトン!》

前回同様、体が勝手に動く。

『リバイスメガロドン!! さあ、一気に食らい付いちゃえ!!』

サメと化した私たちは、大きな口を開き、相手を噛み砕きにかかる。

かなりの勢いで行ったのだが、両手持ちの刀に止められている。そして、相手から金色のオーラのような物が見える。私は急いで離れ、リミックスを解いた。



# No. 9 肉眼で確認するのは初めてだ……実にエキサイティング！

あれは……マスターのところまで似たようなアーカイブ映像を見たことがある。

「……単一仕様能力ですわ」  
ワンオフ・アビリティ

「つまり、アレが零落白夜かあ。フツ、面白いねえ……で、君は何でここに？」

背後に居たのは、先程までリバイスと戦っていたセシリア・オルコットだ。

「……あそこまでの汎用性、そして代表候補生とはいえない慣れない機体であそこまでの試合。一流の技術と正確なバックアップなしでは、いくら何でも無理ですわ。」

「お褒めいただき光栄だが……アレは【私の】完全オリジナルとは言えない……それに、彼女の才能あつてこそだ。つまり、それ私ではなく、彼女に送るべき言葉だ。」

「謙虚ですね。」

「いいや、事実を述べたまでさ。近いうちに、君とは私のオリジナル技術で戦うことにしよう……。」

セシリア・オルコットと話しつつも、モニターから目を離さない。

「さて、ではもう一つ新しいリバイスをお見せしよう。」

私は軽く目配せをし、微笑みながらマイクを握った。

金色のオーラを発してから間合いを保つことを意識しているが、ギリ貧過ぎる。

『ヘイ！待たせたね！このゲノムなら、太刀打ち可能なはずだ!!』

彼のアナウンス後に、左腰のホルダーには新たなスタンプが出現していた。

《マンモス!》

そろそろ何も考えずにゲノムチェンジ行動を取れるようになってきた気がする。

《Come on! マ・マ・マンモス! Come on! マ・マ・マンモス! バディアップ! 巨大なキバ持つ! 陸のボス! マ〜ンモス! はなつからクライマックスだぜ!》

「俺……バイスでーす!!」

今回も二人とも人型だ。バイスが観客席に向かって、自己紹介している。

『必殺技でクライマックスだ!!』

即座にバイスタンプを二回倒し、必殺技を発動させる。

《マンモス! スタンプینگファイニッシュユ!!》

バイスが地面に両腕を突き立てると、10数枚ほどのシールド分身が出来上がる。三か所ほどに空白があるため、手元のブーメランを投げてから移動する。

3か所どこかに出てくる私に対し、向こうは片っ端からシールドを破壊するしかない

ようだ。乱反射するブーメランも当たり何処がなくなりだしたので、オーインバスターのアックスで弾いていく。

シールドが全て削られはしたが、黄金のオーラは消えたようだ。私は第2 Rと構え直したが、その瞬間だった。

『白式シールドエネルギーエンプティ！勝者 更識簪!!』

「え？」「え？」『え？』『全く…』

気の抜けた雰囲気のアリーナに響き渡った。

## No. 10 良いデータが採れた…さて、と

「なるほど…自分のエネルギーを変換して相手のエネルギーを削る。諸刃の剣だね」

織斑一夏の使用する零落白夜のデータを採取したが…あまり使いどころはなさそうだね」

「さて、これでリバイスは今日の戦闘を終えたわけだ…。次の戦い、期待しているよ。」

「ありがとうございます。機体に添えるよう、全力をお見せいたしますわ！」

先ほどまでの会話から以前の慢心を感じなくなった…。今のトリガーガールなら、織斑一夏に負けることはないだろう。

私はラップトップをしまい、タブレットを取り出す。

「残りのゲノムは…あと半分。今回の戦闘で使ったゲノムも再調整して…それに、忙しくなりそうだ。」

私は自身に向けられた、殺気混じる視線を無視し、タブレットも仕舞った。

「ハイハイハイ！素晴らしい戦いだっただよー！」

私は拍手でMVPを拍手で迎え、ドリンクを手渡した。

「えへへ、ありがとう。」

「自己状況判断によるゲノムチェンジも、すぐにうまく活用できr……What's?」  
私はカンザシから差し出されたリバイスドライバーとレックスバイスタンプを受け取る。

「今日は…なんか楽しかった。ありがとう、これは返すね!」

「これもう、君のでいいんだけど?」

「で、でも…。」

「リバイスシステムはもうフィッティング済みだ。もちろん、白紙化も可能ではあるが…。」

「まだ遠慮が見える。正直、ここまで多様なゲノムを即座に使いこなす人物はそうそう居ない。できれば失いたくない人材だが…。」

「ほ、本当にいいの?」

「Of course!!」

私は再びドライバーを手渡した……ま、やや押し付けるようにだけどねえ。少し怯えながらも、ドライバーを受け取った。

「ま、今回の戦いのデータから、本調整をするから、一回預かるんだけどね。」

私はアタッシュケースを開き、ドライバーを収めるよう促した。収まったことを確認し、厳重にカギをかける。

「さて、トリガーガールと織斑一夏の戦いはそろそろ決着かな？」

モニターに目を向けると、予想通りの状態だった。

「では、私はドライバールの調整をするのに、整備室に行くから先に失礼するよ。」

「う、うん。わかった。」

私は荷物をまとめ、両手にアタッシュケース持ち、退室した。

整備室に着いた瞬間だった。先程まで殺気を放っていた人物の気配が強くなった。

「……待っていたよ！そろそろ接触してくるんじゃないかと、思っていたんだよ……」

私の反応にやや困惑しているが、お構いなしに動きつづけ、リバイスドライバールを収納したケースとは別のケースを開く。

「君、これ使ってみる気はない？」

私が差し出したのは、リバイスドライバールとは別の、緑色のドライバールだった。

## No. 11 さて：君たちの実力、見せてもらおう

クラス代表決定戦翌日

「では、クラス代表は織斑君に：」

「え、え、!!なんで：俺全敗したんですよ?」

代表くんが私の顔を見てくる。訳が分からない、といった表情だ。

「私は技術面しか見せてないうえ、戦ったのは4組の代表候補生だ。」

「私は辞退させていただきました。それから、先日は大変失礼いたしました。」

トリガーガールがかなりソフトになったようだねえ。ハハツ、チョロいね。

「そんなわけで、お前が代表だ織斑。」

「頑張ってくれたまえ、クラス代表!」

拍手をすることで、クラスの雰囲気を変える。元より男子をクラス代表にしたかった9

割の女子、そして研究に時間を費やしたい私、うーん、Amazing!!

「それでは授業を開始する。教科書の：。」

さて、適当に思考をまとめに入りますか：。

放課後

部屋に戻ると、カンザシがなにやら慌てていた。

「へい、随分落ち着きがないけど？」

「あ、な、なんかこんなのが…。」

アリーナにて待つ旨の…果たし状のようなものだ。

「行くしかないね…さあ。Let's Go」

アタツシケースを手を持ち、カンザシの手を引いて、アリーナへと向かった。

アリーナ

指定されたアリーナに来てはみたが、呼び出してきただろう人物の影も形もない。

『変身しろ』

突然スピーカーから発せられて声に、やや驚いたが、どうやらボイスチェンジャーでも使っているようだね。

「どうやら、狙いはリバイスのようだ。バックアップは任せてくれたまえ。」

私はカンザシにドライバーを渡し、ピットに避難する。

「さて、どこまでデータを得られるかな。」



「変身！」

《バディアップ！仮面ライダー！リバイ！バイス！リバイス！》

基本のレックスゲノムに変身する。声の主の目的がわからない以上、奇襲が怖い。一先ず、オーインバスターをガンモードで構えておく。

《Confirmed！》

変身時は五感も向上しているからか、ピットからのシステム音声のようなものも聞こえてくる。

《Eeny, meeny, miny, moe！Eeny, meeny, miny, moe！》

『変身』

《バーサスアップ！Madness！Hopelless！Darkness！バット！（Hehe！）仮面ライダーエビル！（Yeah！Haha！）》

変身音が終わるとピットから黒い人物が現れる。手には逆手持ち用のブレードを持っていて。そして、そのブレードには：

「バイスタンプ！」

「さあ、私と遊ぼうぜえ〜…簪ちゃん!!」

私の名前を叫びながら、突っ込んでくる。銃撃をものともせず、楽しむようにこちら

に向かつてくる。オーインバスターを持ち直し、ブレードを受け止める。

「バイス!!」

「はいよ!!」

バイスに援護を頼む。私と黒い人物が鏝迫り合いを行っている中、背後から近づくバイス。

「悪魔だから、卑怯なんて言わないでくれよ!!」

ひっかくようなモーションで黒い人物に襲い掛かる。が、その瞬間私は腹部に衝撃を受け、標的がバイスに移る。

「邪魔するなあ!!」

バイスにブレードの一閃が直撃し、壁にめり込んでいる。私は体制を立て直し、ゲノムチエンジを行うために、右のホルダーに手を伸ばした。が…

『カンザシ!新しいスタンプの調整が完了した!使ってみたまえ!』

左のホルダーに別のスタンプが出現した。私は指示通り、スタンプを使用する。

《《コング!》》

私が新しいスタンプを起動すると、黒い人物も別のスタンプを取り出した。

《《ジャツカル!》》

「一体、あなたは何者なの!」

「勝てたらわかるさ!!」

私と黒い人物の姿が変わるのは同時だった。

## No. 12 戦況の変化は実に好ましいデータだ

《Come on! コン・コン・コング! バディアップ! アーム! ストロング! 戦いの  
ゴング! 鳴らせ! コング! ドラミングキター!》

《バーサスアップ! Hya~haha! Feel a thrill! Spiral  
! 仮面ライダーエビル! ジャツカル!》

私はコングゲノムにチェンジし、黒い人…音声的にはエビルはジャツカルゲノムに  
チェンジしようだ。

「さあて、一気にいくぜえ!」

エビルの姿が消えた。でも、足音は聞こえる。高速で移動しているようだ。

「バイス! 背中任せた!!」

「は〜い!!」

バイスと背中合わせになり、全方位を警戒する。が、高速の斬撃を防ぐだけで精一杯  
だった。が、これはタイミングを掴むまでの措置。

「……………だあ!!」

コングのパワーでエビルを地面に叩きつける。地面に小規模だがクレーターができ

てしまった。

『グウウウレエエイトツ!! 実にWonderfulなPower!!』

エビルのゲノムチェンジが解除され、最初の状態に戻っている。

「さっさと正体を明かしてもらおうよ!!」

《リミックス! 必殺! キング! パンチング! コング!》

いつもの組体操が始まるが、今回のベースはバイス側のようなだ。

「今度はこつちが一気に、いつきまあゝす!!」

「…クツソ!」

《必殺承認! バットダークネスファイニッシュ》

エビルのブレードによる必殺技と、私たちの渾身の一撃がぶつかる。

「うおおおおお!!」「はあああああつ!!」

お互いが弾き合い私たちは、レックスゲノムに戻っている。向こうの状態を確認したが、砂煙でよく見えない。

3〜5分ほど経ち、ようやく砂煙が晴れる。が、エビルの姿はなかった。

「いやゝ、逃げられちゃったねえゝ。」

サングラスのレンズを拭きながら、狩崎くんがこちらに来る。

「ま、とりあえず帰ろうか。シャワーでも浴びてきなよ。」

と、スポドリとタオルをくれた。

私はカンザシを見送り、反対側のピットを訪れる。

「ヘエ〜イ……どうだった？」

私はエビルの中の人間にコンタクトを取る。

「……楽しいわあ〜。」

「ま、ほどほどにしないと、バレた時に余計こじれるから……それじゃ、グツバア〜イ！」

私はピットから出て、部屋への帰路に着く。が、その途中……

「狩崎か。こんな時間まで、開発か？」

「まあ、そんなところですかね〜……織斑先生こそ、こんな時間まで仕事ですか？」

缶コーヒーを飲む織斑

「そうだ……ま、問題児が愚弟だと、仕方あるまいがな」

話の内容から察するに、織斑一夏の補習とあったところか。

「お前……その年齢でその技術。一体どこで学んだんだ？」

「うーん……中々難しいクエスチョンですね。」

「答えられない……か。まあいい。面倒事は起こすなよ。」

そういつて、飲んでいた空き缶をゴミ箱に投げ入れ、織斑先生は去っていった。

# No. 13 織斑一夏の旧友は全員ああ…やかm…五月 蠅いのかい？

リバイスとエビルの戦いの翌日

私は教室で音楽を聴きつつ、各ゲノムのデータの映ったタブレットを眺めていたが、時間を確認しタブレットをしまう。

(残る未使用ゲノムはあと三つ…短期と考えれば実にグレイトなテンポだ。)

現状と今後についての思考をまとめていると、ドアが恐ろしい音で開く。

「織斑一夏居る?」

耳を劈くような声が教室内に響き渡る。イヤホン越しでもそう感じているのだ、ノーガードなら耳に異常を感じているだろう。

「お前、鈴!鈴か、こっちに帰って来てたんだな!!」

あの爆音を聞いた状態で、普通に対応するとは…織斑一夏、やはりどこか…

感動の再会…と、いう雰囲気壊した人物が居た、出席簿で。

「いたっ!って、千冬さん!?!」

「織斑先生だ。それから、すでにHRのチャイムが鳴っている。早くクラスに戻れ。」

「は、はいい!!」

出席簿を上にあげた状態でそういう織斑先生を見た少女は、脱兎のごとく去っていった。

「やれやれ…さて、HRを始める!」

「起立! 気を付け! 礼!!」

こうして、日常が始まる…が、これまた一波乱ありそうだ…。

### 昼休み

食堂でどデカイナルトの乗ったラーメンを食べていると、今朝の声が聞こえてくる。

内容としては、中国代表候補生・2組に編入・直近のクラス対抗戦い出場する、といった感じだ。

「へえ、風鈴音か…。」

私は空の井が乗ったトレイを返却し、教室へと戻った。

### 放課後

私は整備室の一角を借り、リバイスシステムの調整・整備を行う。

「ふむ、大分カンザシにフィットしている。彼女自身がコアとの相性が良いのもあるが



∴。Battle Idealize System∴BAISとの相性も高い。いい感じに学習している。」

リバイスドライバーに蓄積されたデータを参照し、より使用者に合った状態にしている。粗を削り洗練する、この時間は私自身の経験値にもなる。

「ふむ、こんな所か。新しい武器もクラス対抗戦には間に合うね。そして∴一つのゲノムを高める使用のデータはこれでいいが∴。」

「な、なあ∴狩☒。」

「∴まさか、君が来るとはねえ。丁度いい、これ∴使ってみるといいよ。」

私は、黒いドライバーを渡すことにした。

日は経ちクラス対抗戦当日

私はカンザシと共に待機室で組み合わせを見る。

「カンザシは2組の∴∴チャイナガールか。なら、このバイスタンプだ。」

私は最近調整したばかりの新作スタンプを手渡した。

「ありがとう、行ってくる！」

「Good Luck！」

私はサムズアップで送り出した。

No. 14 チャイナガール、君の機体…このスタンプ  
ならいい勝負になるだろうさ、ハハッ

アリーナ

「アレが中国の甲龍シエンロンか…。このゲノムなら、きつと…」

私は彼が渡してくれたスタンプを…。彼のシステムを信じている。それを再確認して、  
スタンプを起動した。

《ブラキオ!》

スタンプを押印し、ベルトにセットして倒す。もう慣れた動作だ。

《Come on! ブ・ブ・ブラキオ!》

「変身!」

《Come on! ブ・ブ・ブラキオ! バディアップ! 最大! 最長! 最古で最強! ブラ  
キオ! 祝え! 長き王の誕生を!》

『Wonderful!! ブラキオゲノムの爆誕だあ!!』

「バイスタア〜イム!!」

「な、なんか、勝てる気がする!」

『これより2組対4組のクラス対抗試合1回戦を始めます!!』

「バトル開始の宣言早くしてよ、山ちゃあくん!」

『え? あ、はい!! デュエル開始イ!!』

なんとも不思議なコールがかかったが、気にも留めず攻撃を仕掛けてくる甲龍。二振りの大型青龍刀が私に牙を向くが、バイスがガードする。

私はブラキオの力で一気に叩きに行くが、躲された。どうやら、思い切りもいいが、切り替えも早いようだ。

距離を取られてしまうが、その分思考時間が稼げる。私は、甲龍に目を向けると少し先の動きが見えたような気がした。

その60秒後、先程見えたビジョンの通りに、甲龍が攻撃を仕掛けてくる。わかってる行動に対しての対応などどうってことないが…。

「このゲノムだと、スピードが足りないことを懸念しないと!」

速めの回避…しかし、それだけでは勝てない。再び距離を取られるビジョンが見える。逃がすまい、と拳を伸ばすと…

「嘘! うわあっ!!」

「……伸びた。」

某麦わらのゴム人間のように腕が伸びたのだ。

「これなら…。」

パンチが直撃し、バランスを崩していた甲龍も、すぐにバランスを整え、持っていた青龍刀を二振りを投げてきた。

それを回避し、彼女の下に戻ろうとする青龍刀を伸びた腕でキャッチする。そのまま腕を戻し、遠心力と伸びる腕を用いて空中の甲龍に青龍刀を当てる。

「アタシの武器で……だつたら!!」

肩付近の非固定浮遊部位が稼働した瞬間だった。見えない攻撃が私に降りかかる。

「な、なに…見えない弾丸?」

確かに、見えない攻撃は脅威だが、攻撃を先読みし、伸びる腕で攻撃すれば…。

だが、相手もそれは予想してくる。伸びる腕による攻撃に合わせて、見えない砲撃を行ってくる。パンチを砲撃で相殺されるのだ。

『こうなつたらスピードで勝負だ!新しいバイスタンプだ!!』

「は、はい!バイス!!」

「はあ〜い!!」

防御をバイスに変わり、新しいバイスタンプを手にした。

No. 15      トラブルは嫌だが：興味深いデータは採れ  
そうだ

《イーグル！》

新たなバイスタンプを起動しすぐにゲノムチェンジを行う。

《Come on！ イ・イ・イ・イーグル！バディアップ！荒ぶる！高ぶる！空駆け巡るーイーグル！（イーグル！）お前の羽を数えろ！》

「組体操、いつきまあゝす!!」

《リミックス！必殺！ミラクル！グルグル！イーグル！》

バイスが私を肩車し、私たちのマントが大きな翼と化す。

「な、なによそれえゝ。」

《イーグルスタンプングフィンッシュ!!》

衝撃砲を避けながら、翼での体当たりを行いつつ、甲龍より上空へと向かう。

「はあっ!!」「よつとっ!」

浮遊している甲龍の足下に向け、竜巻を打ち放つ。機体をとらえ、上空へと舞い上がらせ、私たちは緑と紫の風を纏いながら、両足でのドロップキックを仕掛ける。

が、その直後だ。直上からの異物にそれを阻まれる。

「な、なに?」

アリーナを覆っていたバリアに穴が開いている。そこからは無機物な風体のIS?が、ゆったりと降りて来ている。

「全身装甲!?!…いい、異常事態…よね、これ。」

「う、うん。」

私たちは、降りてくるISから間合いをとる。センサー音のような音を発しながら、こちらに銃口を向けだした。

「!?!」

私たちにターゲットが向いたのか、腕の銃口からビームを撃たれる。私たちは、リミックスを解除し、上と下に分かれビームを回避した。

『What's!!なんたる事態だ!!しかも、ビーム砲だ?!二人とも、とりあえず状態を立て直すんだ!!』

「わかった!!」

《バディアップ! 巨大なキバ持つ! 陸のボス! マンモス! はなつからクライマックスだぜ!》

バイスにガードを担当してもらい、オーインバスターで遠距離攻撃を行う。

「か、硬い。この武器じゃ、ダメージが入らない。」

「ハイ！カンザシ!!」

いつもはスピーカーから聞こえてくるはずの音が、クリアに聞こえてくる。声のする方を見ると…

「か、狩~~箱~~くん!?!」

「コレを!!」

黄色と青の物体を投げってくる。かなりの勢いだが、変身状態なら掴むのに問題はない。

「これは…ハンマー、これなら!」

「新しい武器!うーん、ねえ簪!この武器なんて呼ぶ?」

「か、考えるのは後で!!ありがとう!」

彼は息を切らしながらもサムズアップで応えてくれた。

「でも、こいつを叩きこむ隙が無い!」

バイスの盾に隠れながら、ハンマーを叩きこみに行くタイミングを探るが、攻撃が激しすぎる。

「コンチクしよ〜があっ!!」

甲龍が突っ込んでいくが、やはり攻撃が通らない。

「やばッ!!」

「私たちに向いていた銃口が、甲龍に向く。しかも、0距離だ。」

「ダメえく!!」

「バイスの背後から飛び出し、手を伸ばす。しかし、無情にも銃口から光が発せられた。」



No. 16 実にワンダフオク!! 耐久性のおかげで、素  
晴らしいモノが見れた

謎のISからの攻撃で、甲龍が墜落する。どうやら絶対防御が発動したおかげで、操縦者は無事だが、落下している。

私はどうにか受け止めようとしたが、謎の影が、彼女を空中で受け止めた。

「あ、あなたは…。」

「悪い、遅くなった。」

「……ホントよ、バカ。」

「あとは任せておいてくれ。」

安全な場所に彼女を隠し、彼は黒いバツクルを取り出した。

《《デモンズドライバー!》》

しかし、ご法度を犯すように銃口が彼に…織斑一夏に向く。だが、それを阻止した黒紫の影があった。

《《バーサスアップ! 仮面ライダーエビル! ジャッカル!》》

「はあ〜い、カンザシちゃん〜ん」

左手をくねらせながら、手を振るエビル。

「誰だか、わかんないけど助かった!ふう〜…俺の命くらいなら、いくらでもくれてやる!」

《スパイダー!》

ベルト上部の朱肉のような部分にスタンプを押し付ける。

《Deal!》

宙から機械のクモが降りてくる。

「変身!!」

スタンプをディスプレイに押印すると、ドット絵のようなクモが映る。

《Decide up! Deep Drop Danger! kamen ride er Demon!》

機械のクモが糸を吐き、彼の体を覆い包んでいく。それが、凝縮されるようにアーマーが形成される。

『アア〜ン…ビリィ〜バボォ〜!!まさか、3ライダーが踏み揃うとは!!』

「さあ!いくよ!!」

やる気満々の織斑一夏はともかく、いまいち読めないエビルといきなり連携を取ることに…

しかし、私の心配は杞憂に終わることになった。

エビルは高速移動で、ISを翻弄しつつ連撃を叩きこんでいく。あまりダメージはないように見えるが、その間に織斑一夏がなにやら準備している。

《Add…バツタ！Dominate up！バツタア…ゲノミクス！》《Add…コンドル！Dominate up！コンドル…ゲノミクス！》

複数のスタンプとベルトの操作を行うと、なにやら足と背に変化が起きている。「翼に…バツタ？みたいな足…」

織斑一夏が飛行を開始するタイミングで、エビルがISに下段切りを行う。ISがやや上空に上がると、織斑一夏の足元にちょうど位置していた。

「くらえええ〜っ！」

バツタの強靱な脚力によるケリ落としで、ISが地面へと落下してくる。

「今だ!!」

ハンマーにコングバイスタンプをリードさせる。

《コングーイタダキ！》

チャージ音が鳴り出し、パワーが溜まっていくような感覚がある。

落下してくるISをバイスが、下からシールドで弾き、上に来たタイミングで、全力

の叩きつけを行う。

地面に大きなクレーターを作るが、各部からスパークを起こしながらも、再び立ち上がり銃口をこちらに向ける。

『これで止めだ！私のファイバリットスタンプだ!!』

新たなスタンプがホルダーに現れ、私はそれを手に取った。

No. 17 パーフエクトアジヤストメントツ！流石は私！！

《ライオン！》

新たなスタンプで、新たなゲノムチェンジを行う。

《Come on！ラ・ラ・ライオン！Come on！ラ・ラ・ライオン！バディアツプ！ガオーン！ゲットオン！野獣の王！ラーイーオーン！見ててください！俺の雄叫び！》

『フオオオオオオ！！ライオンゲノム！！ついに爆誕！！』

先程フェイバリットスタンプと言っていたからか、かなり興奮しているのがわかる。

『さあ！リミックスの一撃で止めだ！！』

興奮を隠しきれない指示が飛んでくる。

《リミックス！必殺！チャンピオン！爆音！ライオン！》

最近はこのオート組体操にもかなり慣れてきたもので、自然と脱力状態でいれているが自分でもわかった。

ライオンが出来上がり、雄たけびを上げる。それが壁や地面にダメージを与えている

のがわかる。おまけに、他の二人もガード姿勢を取っている。ISも吹き飛ばすか否かのギリギリの様子だ。

私たちは改めて標的を見据え、突進からの噛みつきを行う。既にボロボロのそれを、そのまま壁へと吹き飛ばす。だが、まだ動こうとする。

「しぶとい…だったら!」

私たちは一旦リミックスを解き、もう一度スタンプを操作する。

《ライオン!スタンプングフィニッシュ!!》

再びりバイスライオンへと戻り、そのままISに噛みつき、壁を駆け抜ける。そこから、上空へと行き、啞えているISを地面に向けて、私たちごと落下する。

『It's so Wild!!』

興奮冷めず、といったところだ。ようやくとISは停止したが、よくよく考えると搭乗者のことを忘れて攻撃を行っていたことを思い出した。

「まっ、もともと無茶な動きや思考パターンだったからもしかしたら…と、そこを前提にライオンバイスタンプを調整していたが。いやはや、無人機とは恐れ入ったよ。」

先程までスピーカーで喋っていたのに、いつの間にやら、狩~~ク~~くんは残骸を弄繰り回していた。

「一体、どこの誰がこんなものを寄こしたのか…。ま、こんな出鱈目なものを作る人物

は限られてるだろうけどね…。」

この会話の間にひっそりと姿を消そうとしていた人物が居たのを見逃さなかった。

「ちよつと待って！」

私はその人物に向き直る。視線の先には、エビルがいる。

「そろそろ、正体を明かしてもらうよ！」

オーインバスターの銃口を向け、エビルの動きを止めさせる。なんとなく察したのか、デモンズもエビルの方を向き、構えている。

エビルは、ゆっくり武器をベルトに戻して、ブレードをしまった。そして、スタンプに手を外し、蝙蝠が去っていくのだった。

# No. 18 色々正体が割れてきたね、一体どうなることやら…

蝙蝠がエビルから離れ、生身の体が露出していく。そこに現れたのは…

「嘘、なんで…。」

「はあ〜い、簪ちゃん」

「お、お姉…ちゃん…。」

見知った顔…それも肉親ということに、私はショックを隠せなかった。そつと、変身を解除し、少しずつ距離を詰めていく。

「私を襲ってきたのが…お姉ちゃんだった、なんで！」

「久しぶりに、遊びたかった…それだけよ。」

「あ、遊び？」

「そ…それじゃあ、彼によろしくね？また、遊びましょう」

そういうとお姉ちゃんは、蜃気楼のように消えてった。

「…霧纏ミスデリアス・レイデーいの淑女」

私は戦いの疲れもあってからか、膝から崩れ落ちてしまった。



気絶したカンザシを抱え、保健室を目指す。

ベッドにゆっくりと寝かせ、タオルケットをそつと掛ける。

「あの戦いの後にカミングアウトとは…なかなか重いね、君の姉は」

ベッドに腰掛け、顔にかかった淡い色の髪をそつと避ける。

「…ありがとう。お疲れ様、ゆっくり休むといい。」

そつと、保健室から退出し、アリーナを目指す。私物を置きっぱなしにしているため、やや急ぎ足での移動だ。

その道中には、ボロボロの織斑一夏に肩を貸す…アレ、名前なんだったっけ？

「貴様！一夏に何を使わせた!!」

肩を貸していた一夏を忘れるように胸倉を掴んでくる存在X。いやはや、怖いね。

「私はデメリットは伝えたよ、その上で使ったんだ。」

胸倉を掴んでいる手首を捻り上げ手を放させ、上着を整える。

「そんなことより、彼を早く保健室に連れて行かなくていいのかい？」

先程放り投げられた織斑一夏は、ほぼ瀕死だ。それもそうだろう、初戦でフィッティング未調整のゲノミクスの二重掛けだ。無理もない、むしろ、織斑一夏だからこの程度で済んでいるようなものだ。

「くつ、すまない一夏。行こう…」

再び織斑一夏に手を貸す存在X。それを見送らず、私も目的地へと急ごうとしたのだが…

「狩区、話がある。」

と、織斑先生に捕まってしまった。が、足元には私の目的のモノである私物もある。

「わかりました、同行しましょう。」

諦めが肝心な場合もあることを、私は再確認した。

連れてこられたのは、地下の一室だった。

「ここは…」

「学園地下にある…まあ研究室だとも思ってくれ。さて…。」

織斑が壁のスイッチを操作すると、一か所がライトアップされる。そこには先程までリバイスたちが戦っていたあのISがあった。

「随分と破壊してくれたが、ある程度分析は進んでいる。さて、これに関してお前の意見を聞きたい。」

「なるほど、そういう…。あくまで私の推測になりますが、こんなモノを作れるのはおそらく地上に1人…」

「ああ、そしてそれは…」

私は無言で返した。同意の無言であることは織斑先生にも伝わるだろう。

ゆつくりとISに近づき、再度状態を確認する。そして、織斑先生に向き直り…

「私の師匠<sup>マスター</sup>である、かの大天災くらいでしょうね。」

そう告げるのだった。

## No. 19 ハハツ、過去回想を語るって難しいね

あの後、軽めの聴取を終え、私物を抱え部屋に戻った。

戻ると既にカンザシは部屋に戻っていた。

「へい、体調はどうだい？」

「……あのシステムをお姉ちゃんに渡したのは……」

「ああ、私だ。」

背を向けたままで私に聞いてきたカンザシは、そのまま質問を続けた。

「私と同室になったのも、リバイスシステムを渡して来たのも……全部お姉ちゃんの差し

金なの？」

「それはNOだ。全ては偶然だ。」

「そう……どうして、お姉ちゃんにドライバーを？」

「あれは……」

クラス代表決定戦後、整備室

「……待っていたよ！そろそろ接触してくるんじゃないかと、思っていたんだよ……」

私の反応にやや困惑しているが、お構いなしに動きつづけ、リバイスドライバーを収めたケースとは別のケースを開く。

「君、これ使ってみる気はない?」

私が差し出したのは、リバイスドライバーとは別の、緑色のドライバー…ツーサイドドライバーだ。

「こいつは疑似ISコアを搭載した試作品だ。本物は動かせないが、ほぼ同等の戦闘力を得られる。つまり、貴方のISコアを使う必要はない…ねえ、生徒会長の楯無さん?」  
「私のことは知っているのね」

「ええ、IS学園生徒会長兼ロシア代表。専用機は自作フルスクラッチモデルで、重度のシスコン。そして、対暗部用暗部「更識家」の17代目当主。」

そこまで言うとは、首元に扇子を押し付けられる。私はゆっくりと手を挙げる。

「そこまで知っているのね、ねえあなたは一体何者?」

「私は、ただの大天災の弟子だよ。それで、どうする?」

押し付けられた扇子を気にせず、ツーサイドドライバーの入ったケースを持って詰め寄り、圧に負けるようにケースを受け取った。

「これを使えば、簪ちゃんみたいに…あんな変身ができるの?」

「Yes! まあ、唯一の欠点があつて、つて…あつ! 行つてしまった」

「と、まあ背を向けた瞬間に持ち去られてしまったってわけさ。」

「…それ、ある種窃盗だね。で、そのデメリットって?」

「本人の願望を強くコアが反映し…人格に影響を及ぼすんだ。」

私の言葉に何かが引つかかったのか、考えるような仕草を取る。

「そうかあの時のセリフは…でもお姉ちゃんの意図がわからない…。」

思考を回す時間というのは大切だ。私もそれは熟知している。タブレットに視線を移し、現状得ているデータの精査を始める。

「……試作には十分なデータが集まったな。あとは、製作と実践データを確保したいが…。」

タブレットを操作し、別のプラン資料を表示する。

「まずはこれから行くか…。」

オレンジと紫のバイスタンプイメージを確認し、タブレットの電源を落した。

No. 20 さて、キャラじゃないけど、背中を押しますか…

私はあの時のセリフを思い出していた。

「久しぶりに、遊びたかった…それだけ…。」

お姉ちゃんの言葉を反復する。しかし、考えれば考えるほどに訳が分からなくなっていく。

「それに、昔のあの言葉…あなたは何もなくていい、私が全部してあげるから…。ダメ、余計わかんない…。」

「…仕方ない。カンザシ、こっちへ。」

狩~~罠~~くんが手招きをしている。誘われるまま、彼に近づいてた。

「これを見たまえ…他人の心を覗き見るようで少々気は重いが…。」

彼はモニターに手を向ける。そこにはエビルのデータが映し出されていた。そしてそこには、お姉ちゃんのメンタルモニタリングのデータもあった。

「これって…」

「疑似ISコア（仮）の仕様も相まって、使用者のメンタル状態や思考までモニタリング

可能になっている。そして…」

「ありがとう、私ちよつと行ってくる！」

リバイスドライバーを手に駆けだそうとする私を狩 $\boxtimes$ くんは止めた。

「全く、姉妹揃って最後まで話を聞かないんだから。はい、これ。」

私の手に何かを押し付けてきた。少しひんやりしているような気がする。

「行ってらっしゃいっ！」

そして、背中を押してくれた。

私は時間も気にせず、お姉ちゃんをアリーナに呼び出した。

現れたお姉ちゃんは既にツーサイドドライバーを巻いていた。そして、言葉を交わすことなく…

《レックス！》《バット！》

「変身」

高らかなものではないが、確固たる意志の籠った変身だった。

《仮面ライダー！リバイ！バイス！リバイス！》

《仮面ライダーエビル！》

手を鳴らし、オストデルハンマー（バイス命名）を振り回しながら構えるバイス。



「バイス、手…出さないでね。」

「え、なんでもえ。」

「お願い。」

「……わかったよお。」

やる気のあつたバイスに釘を刺し、オーインバスターを構える。

エビルもエビルブレードを構えて、いつでも行ける状態のようだ。

しばらくは見合う時間が続いたが、先に動いたのはエビルだった。私もそれに合わせるように、相手に向けて駆けだす。

エビルブレードの斬り上げとオーインバスター振り下ろしがぶつかり合う。

つばぜり合いは拮抗し進展がないことを互いが察した。そして、ほぼ同時に蹴りを入れ合う。

エビルは転がり体勢を整え、私は無理に耐えた。そのせい、エビルの攻撃に私は反応できず、直撃を受けてしまった。

かなりノックバックがあつたが、すぐにオーインバスターをガンモードに持ち替え、すぐに銃撃で応戦。しかし、半分ほどを避けられる。

「やっぱり、私とお姉ちゃんの戦闘経験の差が大きい！」

以前はゲノムチェンジによる翻弄と、エビルでの戦闘が不慣れだったことで、勝てた

が…。

エビルブレードでの斬撃を受け、私は地に伏した。

が、その時だった。部屋を出る前に渡されたものが地面に転がった。それに手を伸ばし、掴み取る。

「これは…」

私は、もう一度立上がり、「ソレ」とレックスバイスタンプを構えた。